會報

1951年11月 | 158 | 日本山岳會

英京秋信

島田巽

折角ロンドンの空氣を吸いながら新聞記者のかなしさ、毎日六つも七つも新聞は見ねばならず、人にも會いに行くし、記事も打電せねばならずといつた次第で、のんびり樂しむ暇が仲々なく、せいぜい休日に郊外へ出て英國風景画の傳統的な構圖の中を歩き、十六世紀頃からあるという、小さな旅宿で食事をしたりしては、さゝやかに英國を味つている次第、まだスコットランドの湖畔にも行く暇のない内に、旅行シーズンが終りそうで、がつかりです。總選擧が今秋になつたのも大痛手で、小生が英國人ならくやしまぎれに、保守黨に投票するかも知れません。

忙しい仕事の一つにはエヴェレストの記事や寫眞を日本へ送ることも含まれています。これはきつと朝日紙上で讀んで下さつていると思いますが、私の事務所のあるタイムスで屆けて貰うと、エアメールの時間をにらんで、中央郵便局へ飛んで行つたり、米國廻りとインド洋廻りと同じものを別々に出したり、一日も早く日本に着くようにと、まるで綠の下の力もち見たいな仕事もやるのです。もつとも、これがエヴェレストのことなので私も樂しい次第、競馬か何かなら平氣で一日や二日ほつておくかも知れません。

エヴェレストの記事は今年も英國ではタイムスが掲載しているのですが、いろいろ外の新聞から版權獲得の申込みがあつたそうです。しかし、この企てにもつとも適する新聞はタイムス以外にないということになつたわけです。果してどこまで登れるかはわかりませんが、來年あたり本格的にやるらしいし、いずれこの年末シプトン一行が歸つて來たときにはレクチュアをきゝに行きたいと思つています。

タイムスはジュネーブにアルバイン・コレスポンデントを置いているので、山の記事はマッターホルンのケーブルカーにせよ、遭難記事にせよ、ヴァリエーションの登攀にしろ、實に正確に出ます。大したものです。今日は、あるガイドがマッターホルンの山稜で丁度マッターホルンそのまゝの形をしている岩塊を見つけたので、これを報告したところ、スイス・エアーのニューヨークの事務所に飾ろうというわけで、ロープで下したり、背中にしよつたり、馬の背にのせたりして下したのを、今度はスイス・エアーの飛行機で大西洋を飛んで行くという電報まで來ていました。日本でもアルバインコレスポンデントが氣持のいゝ記事を送つてくれるといゝと思うのですが。

ロンドンではこの秋の讀書シーズンに山仲間の興味をひく本ではウインスロップ・ヤングの Mountains with a Difference (E&S刊18/-); Noel Annam著 Leslie Stephen, his thought and character in relation to his time (MacGeel & Kee 25/-) の廣告を見ましたが、まだ實物にはお目にかゝりません。それまでの（春のシーズンまでの）本は松方氏が持歸られて御覽のことゝ思います。

古本屋さんでは、松方氏とFrancis Edwardの三階あたり、地階などを探しまわりましたが、お茶の水にカタログの來ていた Gaston という本屋のことも、松方氏のお土産話に出たことと思います。よく探しあてゝ來たなと日本のお客さんに先方が驚くとともに、初訪のときから友だちになつたFrank君という山の本愛好のオヤジさんあの本はそうだ自分の家にあつたんだが、店にあつたのかと考えたりする程、商賣と道樂の境のつかなくなつた御仁、何でも喜んで探してくれるのですが、その店たるや、あの立派なカタログとは似てもつかず、場所こそストランドの目抜きとはいうものの、文房具屋のドアをあけて横の廊下をブツかると洋服屋、そのギシギシいう廊下を左折すると、やつとドアがあり、ノックするとカビ臭い空氣がモレる窓もない一室、はいるとA・Jだのヒマラヤン・ジャーナルだの、ほこりにまみれている有樣、今日もA・Jの揃い二七巻までで二十一ポンド、買わないかと手紙をくれました。ことおつきあい願つていると、ロンドンで洋服どころか食うにも困つてきそうで、あのカタログの惡因緣おそるべきものと思つています。松方氏は幸い、さつさと歸られたからよいようなものの、私など當分はつかまりそうですが、案外喜んでつかまえてもらいに行くのかもしれません。現代名著百選とでもいうべきブック・リーグ主催の展覽會に、シプトンの Nanda Devi が加わつていたのも愉快でした。

歸つたら松方氏と行を共にしたグリンデルワルドの色寫眞でもお目にかけたいと思います。

（九月廿八日）

☆　☆　☆

老兵物語

初登攀のものがたりする

加納一郎

ヴェテランとわが名よばれんこゝにして

旭岳のやわらかいお花畠をしとねに、私は老妻と六年生になる三男の登とをかたわらにして、ねそべつている。爆烈火口から出た澤は、はいまつの原の向うにおちて、それが遠く森のなかをひとすぢに下つている。これがユコマベツの澤である。この澤をきのうと今日と二日がかりで登つてきたのである。この登路は一九二二年の一月に、われわれが旭岳の冬山の初登攀のコースとしてえらんだものである。

それまで旭岳の登山は夏山にかぎられていた。登路は松山温泉から羽衣の瀧のわきをのぼるのであつたが、この斷崖の道はスキーにはむかなかつたので、われわれは、はじめピウケナイの澤をえらんだが成功しなかつた。その翌年に、はじめてユコマベツの澤をこゝろみ、二日間の瀬ぶみと道つけののちに、厳冬の旭岳をきわめることができたのであつた。同行は五人であつたが、そのうちの二名はもう鬼籍に入つている。ことにリーダー格であつた板倉勝宣君は、それからちようど一年のちに、立山の吹雪のなかに、たおれたのであつた。

夏冬をとわず、ユコマベツの澤を旭岳の登路としてえらんだのは私たちが、はじめであつた。それからほぼ三十年たつて、私は同じみちをたどつて、ふたゝび旭岳を訪れたのである。

目はうらうらとふりそゝぎ、そよ風がすゞしく、視程は百パーセントである。私が冬山の初のぼりの仲間に入ることができた十勝岳も芦別岳も、手にとるように見える。

吾子(あこ)よ見よわが冬山の新記録
たてし山々あれとあれとよ

二千メートルそこそこの小さな山の小さな記録を今さら人にほこる氣持はないにしても、自分の子供には、新しい道をひらき、ふみ跡をのこすことの意義を物語つてもよいであろう。その場にきてその峰をあおぎ、彼の山々を指ざしながら、私は誰に遠慮することもなく話してきかせた。

妻をたずさえたのは、病弱の私のこの冒險へのさゝえとしてゞあつた。私は一昨年秋に左腎をわずらつた。古い本だが、入澤達吉の内科讀本には、豫後は二三年でおしく不幸な轉歸をとるとかいてある。今ごろは初盆をむかえているかも知れなかつたものを、新しい藥と知友家人の心づくしのおかげで、危機をぬけて小康をたもちつゞけ、旅にも出かけられるようになつた。それにしても、このような山のぼりが非常な負擔であることはいうまでもない。緣のない山ならば、もとより登る氣は起らない。しかしあのユコマベツの澤に、北海道林務部のヒュッテがあり、温泉がついているばかりか、その二階のたゝみ敷きの室からは、旭岳が眞正面にあおがれる。よつてこれを仰岳莊と名づけたときいては、遊意とどめ難いものがある。それにつゞく國有林にも白雲莊ヒュッテが立ち、今年はその下に、民營の大ロッヂ

ある登山家の邂逅

（その一）

成瀬岩雄

『コル・デュー・ミディーの小舍で私はお茶を沸かし、之から飲もうとしている時に、マンメリーの良き山友達として有名なる、ノーマン・コーリーをリーダーとした一隊が、エグイユー・デュー・ミディから到着した。私は彼、ノーマン・コーリーとその仲間に會つて、お茶を一杯すゝめて嬉しかつた。コーリーは其の厳しき、薄黒き顏に、瞬間、ニヤリと笑みを浮べた。私としては、彼を笑わせたのは、其の日のモンブランの登山よりも遙かに大きな殊勲をたてたような氣がしたのである。マンメリーといえば、マンメリーについても亦、私は偶然、その姿を見た事があるが、それはアレキサンダー・ブルゲナーと一緒に、テオドル・パスを越えている時、背の高い英國人が騾馬に乘つて、シュワルツゼー・ホテルの方へ行くのに出會つた。その樣子が、猫背で、長い足が地面に引擦つているようで、どう見ても乘馬が得意であるようには見えなかつた。しかもピッケルを持つているのは滑稽に見えた。アレキサンダーは其人に非常に丁寧に挨拶を交わしたので「あんな、變な恰好の人は一體、誰なんだい」と聞いた處、「あれが、マンメリーですよ。あの人は私よりは遙かに能く岩を登りますよ」との返事であつた。が其時は既に見えなくなつてしまつていた。この立派な登山家に對して、私は早計にも勝手な比判を下したことに衷心より後悔したのである。そして埃だらけの騾馬路の所では、眞の登山家は額に汗して歩いたりして、登山家であるという事を示したりする必要はないという事を教えられたのである』

とはオースタリーの生んだ高名なる登山家、ユーリアス・クギーの、一九二五年の名著、「一登山者の生涯より」の中の一節であつたが、今以て私の腦裡に深く祕められて、忘れられぬ一節であつた。

近着のカナディアン・アルパイン・ジャーナルは、ノーマン・コーリーの訃報を掲げているが、その中の、ウインスロップ・ヤングの追悼文によれば『彼、ノーマン・コーリーは蒲柳の質で、むしろ、老衰しているかに思われるような、痩せこけた銀灰色の顏色をしていて、彼と趣味を同じうしない

が完成した。來年はここまで自動車道がつくだろう。やがてこゝは一つの溫泉集落になる計畫だというにいたつては、ぢつとしていられない。

幸にして林務部長の小瀧武夫君が一番に私の心もちをわかつてくれ、その一方ならぬ御好意のもとに、林務部と林務署の各位のおせわをうけて、三十年まえに、吹雪にたゝかれ、なだれにおびえつゝ、重荷を負い、二十萬の地圖を唯一のたよりにして、夜道をかけて上下した、そのおなじ道を一物をもたずさえずに、妻子をともなつて、のろのろと歩くことができ、好天にめぐまれて、思いのたけの回想にふけることができたのである。何という幸であろう。

はいまつのしげみに立てば登攀の
回想はつきずわれは山の子

さきに初登山の仲間の五人のうち、二人は死んだと書いたが、そのなくなつた二人と私と三人で、おなじ年の三月に、大雪火山の、旭岳とはちようど反對側にある黒岳にのぼつた。これも冬山としては、初めてであつて、登り口の層雲峡の溫泉はまだ掘立小屋に丸木橋という時代であつた。その丸木橋で板倉君があやうく滑りかゝつて、身がわりにスキーの杖をながしてしまつたというような話も思い出される。

それから間もなく、こゝには大きな溫泉旅館がたち、道がつき、バスが通うようになつて、大雪山といえば層雲峡がのぼり口のようになつてしまつた。なるほど中央高地に源する大石狩の本流にそうている景勝の地ではあるが、最高峰の旭岳への登り口としては、こゝはどうしても裏口という感じがぬけず、關係業者が「大雪山國立公園の入口はこちらでございい」と、にぎにぎしくわめき立てるので、官公廳の施設も、これにひきずられていた形で、實のところはなはだ不見識なはなしであつた。

大雪山國立公園の入口としては、帶廣からぐつと奥まで國鐵の入つている三股高原もあるし、まだ開けはしないけれども十勝川上流の原生林地帶もあり、旭岳の正面口としては、忠別川流域からするものをとるのが穩當であろう。その登路のユコマベツにいくつかの溫泉つきのヒュッテができ、近くはバスがとおるというほどに、すゝんできたのは、三十年の昔をしのぶ私には、落ちつくべきところへきたという感じがふかい。何も山の登り口のうらおもてを區別したり、しいてその優劣をくらべる必要もないが、一部の業者の利益のために、自然の道がゆがめられている例は少なからずあり、こゝにもそのような傾が見られたことを指摘したいのである。

ノカナブンからユコマベツ溫泉までのバス道ができると、松山溫泉までバスを利用し、そこからユコマベツ溫泉へのぼる現在の登山コースはさびれるであろう。このことを松山溫泉で話したら、それもそうだが、近ごろは、トムラウシを目ざしてくる人がおゝく、あちらの自動車がついても、トムラウシから奥山へかける人たちのために、こゝは優に榮えて行くであろうと、いつていた。北海道の山ずきの人たちが、旭岳のコースから、さらにそのようなくろうとじみた道をえらぶようにすゝんでくれるならばよろこばしいことである。けれども私ののぼつた八月十二日という、登山の最盛期の、絶好の晴天でありながら、この日、この主峰の登路において行きあつた登山隊は五指を屈するにいたらなかつたという事實も、また考慮に價することではあるまいか。

八千萬のことを思うと息がつまりそうであるが、大雪山といい、阿寒といゝ、國立公園になつていても、北海道にはまだ一日あるいて十人の人にもあわぬところがあるのである。

（カットは川喜田壯太郎氏）

者は容易に彼に近付く事が出來なかつたので、彼の友達は、趣味を同じうする少數の者であつた。そして相手に興味を持つた時は、彼の見拔くような眼は、突然個人的の同情に燃え光つた。一面、相手に興味を持たぬ時には、興味を持つているように裝う事すらできなかつたし、其の人間がそこに眼の前にいるという事を意識しているような樣子を見せようともしなかつた。

ドイツの第一回ナンガ・パーバート遠征隊のリーダーが第一回遠征の唯一の生存者のコーリーを紹介してくれと言つてきた事があつた。このドイツ青年は金髪の房々した、無遠慮な、活動的な青年で、「ドイツ・ナンガ・パーバート遠征隊隊長」と鮮やかに印刷した名刺を出したものだ。時、恰も中世紀から出て來た樣な逍遙藝術學者の樣なノーマン・コーリーは綠の深い、黄色の、象牙色の横顔を、塵りの掛つた青銅と錦織の方向――コーリーは骨董に對して非常に高い見識を持ち、又蒐集家でもあつた由――に向けて、むしろ幾らかその嘲弄的に半分笑つた顔付は、何處か狼つきの樣な顔をして、見ていたが、その兩者の、時と氣質の距りに確然たるものがあつて、到底、橋渡しする事ができなかつた』というような事が書いてあるから、まあ、明朗快活とか、誰にでも人障りがよいとか、いう方ではなかつたらしい。成程其の寫眞を見ても、ヤングのいう事も想像できるような顔付であるが、この氣難しやを笑わせたというのだからクギーは餘程嬉しかつたに違いない。何しろ相手は、日頃彼が尊敬措く能わざりし、アルパイン・クラブの重鎭の事だし、こんな氣難しい親爺だ位の事は、クギーも知つていたと見えて、其原文を直譯すれば『笑わないのを、何んとかして笑わすのに上手く成功した』というような書き方をしているのを見ても、クギーにして見れば、餘程の殊勲でも立てたような氣になつたのも無理ないであろう。兎に角、山の小舍で初めて會つて、お茶の一杯位でチョット笑つて貰つて、大の男が子供みたいに喜んでいるのだから面白いではないか。それもプリーフ・スマイルとあるから、ほんの瞬間的にチョット、ニヤリとした位らしいのであるが。

このクギーの「一登山家の生涯より」は一九二五年に初めて出版され、アルパイン・ジャーナルの書評では、ファーラーが激賞して、ギドー・レイの本のように是非英譯さるべきであると言つて居り、マンメリーは夙に亡しとはいえ、

ノーマン・コーリーは、當時アルパイン・クラブの會長を務め終えて間も無い時であるから、勿論この一節は讀んだであろう。そして亡きマンメリーの事でも思出しながら、あの狼つきのような顏が「突然、個人的同情に燃え光る」時の微笑を洩らしたであろう。

最近のオースタリヤ山岳會の年報によれば、このクギーが一九四五年に亡くなつた事を報じているそうであるから、八十七歳迄生きた事になる。ノーマン・コーリーは八十三歳で亡くなり、共に「登山史上の人」となつてしまつただけに何忘れられないエピソードではないか。

もう一つ、此處に記して見度いのは、このクギーがツエルマットでアルパイン・クラブのお歴々に邂逅する場面があるが、日頃彼が尊敬措く能わざりし、アルパイン・クラブの錚々たるベテランに取圍まれて、眼を輝かし、耳を欹てたであろう樣子がうかゞわれて、微笑しき一章である。それは彼が永年胸に抱いていたイタリヤのマクニヤガからモンテローザ越えをやつて、リッフエルハウスに來た時の事、

『翌晩、我々オースタリヤ人はツエルマットにあつたアルパイン・クラブのメンバー連から、モンテローザ・ホテルに招かれた。パンチは有名なる地酒のヨストを混じたるもの。このパンチは非常に勝れたもので、其の芳醇たるも亦何時迄も記憶に殘る勝れたものであつた。それにも増して錚々たる登山家連が、長テーブルの前に我々と共に座したのは永久に忘れられぬものである。エグイユー・ブランシエー・デュー・ベテレの征服者、ゼーモア・キング、コーンウエー、デビッドソン、エクルス、フッッゼラルド、エッケンシュタイン、其他多勢であつた。彼等は私のために英國の歌を歌つてくれ、私は御返しにカリンシヤの歌を歌つた。誠に奇しき一夕であり、夜更けて漸く寢についた。後から思い合せて見ると、ファーラーも亦其の場所に、或は近所に居たに違いないのだが、どうも其點判然覺えていないのであるが。數年後、アローラーで遭つたのは判然覺えているのであるが。英國登山界の貴族的な、一見控え目なるとは著しく異つて、我々大陸の登山家の特質をよく了解して、彼との間柄を斯くも密接に結ばしめたのは實に彼の親切であり、威嚴であり、能き理解ある所である。彼こそは我々とあの歴史に輝くA・C――原文、原文字の儘――との間に貴重なる繫りをつけてくれる人物であるという印象を與えたのである。彼は紳士で、彼に向つて唯の數語語つただけで、ノートペーパー一枚だけでも、喜んで助けてくれるような人である。そして物判りがよく、明朗で、正しく、登山の最高の理想を心から抱いて居り、人と人の結びということを求め、分裂をいとうたのである。もう一人、偉人、エドワード・ウィンパーが其處にいると思つて探して見たが無駄であつた。彼はいつでも少し離れていたとの話である。

之等英國の登山家連は私にとつては非常に魅力があつた。私は彼等を尊敬し、崇拜して成人して來たのである。私は彼等の實際登つている所も見、高名なる人が、來る年も來る年も、いかにも落付いて靜かにしかも自信を以て山登りに出掛けるのを見た。又その登山が終えた時には靜かにホテルに歸つて行くのを見た。あゝ、我々若い者達も年老いては彼等のようになりたいものである。實に彼等こそはこの世に、何物を以てしても比較さるべきものなき傳統の保持者である』と

綺羅星の如く並んだ、何れも世界中の山を股にかけた、巨豪を前にして、クギーの得意や、誠に思う可しではないか。窓から洩るゝ彼等のバスやテノールは夜更けたツエルマットの村に靜かに流れ去つたであろう。山登りの他に音樂に對しても異常なる趣味を有し、又自らもピアノを能くし、しかも教會のパイプオルガンを常に彈いて居り、別に「音樂、勞働、山」という書迄著したというクギーにとつては、正に「神々の出現」でもあつたろう。

彼のギドー・レイのテオドル・パスに於けるウィンパーとの邂逅の有名な劇的描寫等は昔、「山行」が初めて出版された時に、當時中學生であつた私は、いたく感激したものだが――勿論今でも山岳文書の中の白眉だとは思つているが――今、其のギドー・レイに山の宿で邂逅して感激している熱情登山家がいるのだから、世のめぐり合せとは面白いものである。しかもこの感激の主はまたしてもこのクギーなのだから運命の神の仕業とはいえ、正に一幅の繪卷物が出來そうである。しかもその邂逅の場所もマッターホルンのイタリヤ側の谷、その昔、ギドー・レイがウィンパーに邂逅して彼の不朽の名文をなさしめた地の、テオドル・パスより程遠からぬ、ブルイユの谷に於ける一幕であるから、奇しくも亦微笑ましい情景ではないか。

× × ×

望展上山

福岡山の會から明一九五二年にシッキムヒマラヤ遠征の計畫が發表されたのは、近來の嬉しいニュースである。名目だけで實質的には獨立國とは言い兼ねる、今の日本から遠征などゝは……という議論もあるだろうが、選擧對策と土産物漁りがめあてに桑港へ繰出した、百姓議員團のような不純な動機がないだけに、遠征の實現と成功を望むや切なるものがある。遠征の計畫や、新聞記事を見て些か氣になつたのは、實業山岳團體、社會人の登山團體、或は學生山岳團體というような文字である。いづれも餘り明瞭でない表現だが、何かそこに對立的な意味が含まれているように感じられるのはヒガ目だろうか。學校を卒業すれば誰も彼も社會に出るのだ。なにも實業だの社會人だのと接頭語をつけて、學校學生と殊更に區別したり對立させるには及ぶまい。また學窓を出てから何年たつても丸丸大學山岳部の殼を抜けきれず、大學山岳部の飯を食わなければ登山者として通用しないかの如く考える者が若しありとすれば、これも餘程おかしい。學閥は岳閥に通ず、とんな洒落は當節流行らない。（不二）

ボンベイへ

ナンダ・コートの初登頂

堀田彌一

（佐藤久一朗氏作）

クリーではやつとである。第一日はナルスパンパッテイの河原、第二日はマルトリ、以下ラスパ、バクデアールと泊りを重ね、これでは本隊に長く待たせる事になると言うので、連絡の爲手紙を持つてマテルダス警部に先發してもらう事になつた。輸送隊は以後ムンシヤリ、ギルガオン、テジヤム、サマに泊つて十七日にカブコート、十八日にバゲシュワール、十九日にソメシュワール、二十日にアルモラという豫定である」と。マテルダスは今朝テジヤムを發つて二日路を一日で飛ばして來てくれた。

そこで翌日、我々はここに着いてから四日目の朝、アルモラを指してバゲシュワールへ旅立つた。

十八日の朝、我々はアルモラへ歸つて來た。カブコート——バゲシュワール——ソメシュワール——アルモラと往路とは違つた行程をとつて、アルモラ——バゲシュワール間は徒歩の場合、トクラを經由した方が近いが、ソメシュワールとアルモラの間は、自動車が利用出來るので、我々はそれを選んだ。又竹節と私はバゲシュワールとソメシュワールの間を驢馬に乘つたので、結局バゲシュワールから歩かないで濟んだ。

五時發の一番バスに乘り、アルモラに着いたのは朝の七時頃であつた。アルモラを近くした頃、バスの中から、遙か彼方にナンダ・デビーを望む事が出來た。全くの快晴だが、幾らか霞んで見えるのは如何にも隔りの多い事を示すものである。往きには、アルモラへ着く三十哩程手前のラニケットの峠で自動車から下りて、全く微かなナンダ・デビーをちよつと望んだだけで、アルモラでは一度もその姿が見られなかつたが、今度は街外れの見晴しのきく處からも、ダック・バンガローからもよく見えた。

氣候もずつと良くなつて、からつとした快晴が續き、直射も大分弱くなつた樣に感じられる。未だ日中は可成り暑いが、大體住みよい季節となつた。電報を打つたり、手紙を書いたり、荷物の整理をしたり、樣々な用事の合間には街へ行つて、げてものを漁るものもあつた。街の人々とは話をしたり、顏なじみも出來た。輸送隊を待つた三日間は、我々に十分アルモラ情緒を味わさせてくれた。二十日には廣瀬、ヌルサン及びクリー一同全員、無事に歸つて來た。クリー達は最後の支拂いを受け、喜んでこの日も輸送隊は遂に來なかつた。併し夕方マテルダスが飛脚代りとなつて到着したので、事情がよくわかつた。即ち彼の話と廣瀬の手紙により次のような事が明かになつた。

輸送隊の通路は上から下つて來る羊の大群でいつぱいであり、これを追い越す事が仲々むづかしい。その爲行程は捗らず、まだ二日は遲れるだろう。早くアルモラへ行つてゆつくり休息される方が宜しかろうと言う進言であつた。又廣瀬の手紙には「出來るだけ荷物は整理したが、マテルダスのものだけでも二人分あり、整理し切れないものも澤山あつて十五人の

で引上げて行つた。我々は直ぐに廣瀬を留守番に殘し、マテルダス、ヌルサン、アンツエリンをも同伴してデプテイ・コンミツショナーの處へ挨拶に行つた。デプテイ・コンミツショナーは夫人と一處に庭へ出て來て、寛いだ氣分でナンダ・コートの事などを尋ねられた。これで廣瀬達が途中で馬に託した荷物が本日中に着けば、凡ての用事も片附いて仕舞う。明日こそアルモラともお別れだ。惜別の情に堪えない。一方、歸心ももだし難く、心は既にボンベイ、カルカツタ、そして故國へととんでいた。

翌日、バンガローの入口の直ぐ近くで道路が廣く擴けた處へ、二臺のハイヤーと一臺のトラックが來て居た。我々と荷物を運ぶために手配されたものである。アルモラの土民達は大勢寄つて來た。お祭りかバザーの賑かさであつた。恐らく彼等にはこの三臺の乘物が珍らしい事に違いない。併し我々にとつては、最後の別れに全く相應しい情景だつた。民衆の中には、我々のキャラバンに參加したクリー達も混つて居る。やがて自動車が動き出すと、彼等の姿も、街並も、見覺えのあるものは次から次へと車窓から消えて行つた。

ラニケットでマテルダスを下し、途中二三回休んだが、八十五哩の道も數時間でとばし、カトコダムに着いた。そこから汽車の旅を續け、バレリーでカルカツタ行きに乘替えるヌルサンとアンツエリンに別れた。「チテイ・マンタ」と言うアンツエリンの最後の言葉を時に私は思い出す。この簡單な「お手紙を下さい」と云う言葉は又ヒマラヤへやつて來て下さい、そして自分達がお供出來る樣に、お手配とお手紙を下さいと言う意味である。途中二度乘替えたが、印度大陸を横斷して四十數時間の暑苦しい汽車旅行の終點として、我々はボンベイの中央停車場に着いた。

汽車から下りるとがらんとした大きなプラットホームに、一群の人々が目に附いた。我々を迎えるために、列車の到着を待つていた邦人の方々である。中でも、今度の計畫に對し、大變御世話になつた林さんに初めてお目にかゝる事が出來た。同行の廣瀬はこの都市の住人であり、迎える人々の氣持にも、よそ事でない樣な感じが溢れていた。

ボンベイでは、十月二十三日から二十八日迄氣持よく過す事が出來た。林さんが非常に喜んで下さつた事と、身内のものゝような行屆いたお世話に、すつかり甘える事が出來たからである。試みに燒

附けたナンダ・コートの寫眞を、三井銀行の支店長席で、來客に見せ乍ら迚も嬉しそうであつた。山縣と私が林さんのお宅に泊り、他のものは東洋綿花の小越さんの處に御危介になつた。日本人會は盛大な歡迎會を催して下さつたし、各商社の方々もあちこちの案内や會食等にいつも親切にして載いた。

旅行者を呼ぶ名所には、滿足出來るものは餘りないように思つていた私は、エレファンタと沈默の塔で考えを改めさせられた。エレファンタはボンベイの近くの小さな島である。約千年前に回教徒が印度に侵入し、ヒンヅー教の文化を徹底的に破壞し、その時の廢墟がこの島に殘つて居り、洞窟の中の彫刻には榮えた昔の名殘りを留めていた。沈默の塔はパーシー教徒の死體を禿鷹に喰わせる塔である。パーシーは一つの人種であり、昔から消え絶やした事のない白檀の燃える聖火を安置し、火を崇め信ずる教徒である。從て神聖なる火で死體を燃やす樣な火葬は絶體にしない。最も自然に屍を鳥に喰わせるのである。森の中に立派な塔があり、塔の上に死體を揭げて置くと禿鷹が來て喰い、白骨が樋の中を傳つて下りて來る仕組になつている。

この塔や聖火を安置してある建物等が一つの圍の中にあり、莊嚴な圍をなしている。死人のない時は羊を塔に揭げて、禿鷹が森から逃げて行かないようにしてある。この圍内に入るには特別な許可がいるが、領事の取り計いと三井銀行の池田さんの案内で見學出來たのは幸であつた。又林さんと一緒に博物館や植物園も見學し、造詣深い説明を伺つた。博物館では古代印度文化の一端に接し、植物園では樣々な珍らしい熱帶樹と共に美しい園内の狀景が思い出となつた。

ボンベイ市はサルセット島の南端にある。サルセット島は島とは言うものの、大陸から流れて來た河が海に注ぐ直前で障害物にぶつかり、二つに分流した流と、海とに圍まれて出來ていた。從て島と言うより半島と言う感じが強く、不注意な旅行者には大陸から何時渡つたのか氣が附かない。私はボンベイに着く三十分前に渡つた鐵橋を漸く思い出した。

海は泥海らしく、波らしい波もないが、潮の差が非常に激しく、滿潮と引潮の差が深さ十數呎にも及び、港と反對側の遠淺の處では干滿による水陸の差が千米にも達すると言う。海岸通りは完全に鋪裝した廣い通りで、タジ・マハールホテルを始め、立派なビルディングと、奇麗なヨットを浮べた海面に接していた。散歩道としても快適であり、夕方の涼場ともなつていた。そこから續いた一角が突き出て、廣場となり、先端には「印度の正門」がある。黄色がかつた大きな玄武岩で造つた素晴らしいものであり、一九一一年のジョー

昭和廿六年度會費

★年額　三〇〇圓
（基本額一五〇　山岳代一五〇）
★東京支部五〇〇圓
（基本額山岳の他圖書室維持費一〇〇　支部費一〇〇）

會費は會の活動と發展の源泉であります。本年度の會費未納の方は至急お納め下さい。本會の財政は印刷費にも事缺く狀況で樂觀を許しませんので、會員各位の御協力を切望します。

ジ五世陛下とマリー皇后陛下の印度訪問を記念する爲、建てられたものであると。

時には又ドライブして街から外れると、椰子と美しい海面が南海特有のものであつた。

ボンベイの街は奇麗で、カルカッタのようにビジネス・センターを牛がノロ〳〵するような事もなく、清潔で氣持がよかつた。緯度もずつと南に下つているが、カルカッタの樣な苦熱の時季がなく、暑さも平均して居り、海から靜かな冷風が吹き寄せ、印度では住みよい處であると。港は滿干の差が激しい爲、ドックが必要である。幾つも並んでいる大きなドックの一つには、名前は忘れたが二三日後に出航する郵船の船が一艘繫がれていた。それに乘れば、豫定より幾日か早く歸國出來るのだが、我々はカルカッタに寄つて御世話になつた各位に御挨拶し、無事に歸つて來た報告をしなければならない。

こうして我々は、十月三十日に再びカルカッタに戻つたのであつた。（完）

「山岳」投稿規定

一、原稿の採否は委員會で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究、紀行は概要を附すこと。
一、紀行には概念圖添付のこと。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付け必ず説明を附すこと。
一、地名、人名、數字、外國語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振假名のこと。
一、編集者は原稿の一部を削除又は訂正することがある。

山に行つて思いついたこと

日高信六郎

今夏は白馬から後立山方面に出かけたところ、時期が早すぎて雨にふられさんざんであつた。さいわいつれて行つた案内人は細野の丸山武四・大町の丸山充嘉といずれも五十を越したヴェテランであつたから、今昔さまざまの山話をかわして、雨やどりの退屈を感ぜず人のいない山と靜かな山小舍の數日を滿喫することが出來た。

施設が整つて登山が安易になり、登山技術が進歩普及しても、山案内殊に良いガイドは不要にはならぬ。ところが昨今の經濟事情では、誰でもガイドを雇うわけには行かず、他面むつかしい山に挑む元氣な登山家はガイドをつれないことに一種の誇を感ずるところもあつて、結局彼等は團體登山の案内か、古くからの御得意（山好きの夫婦や家族づれの好ましい山行が多いらしい）の御伴ということになつているようだ。そこで年配の經驗者はだんだん引退する一方あら手の養成修練は次第にむつかしくなり、案内者の數と質とは登山者の激增と登山技術の進歩と

に反比例する實情である。この問題は山岳會で眞劍に取り上げてもらいたいものの一つである。

ところで山案内は彼等にとつて大事な生業であり、お客がつれて行つて呉れなければ好きな方面へ出かけることは出來ないし、登山期以外にはそれぞれ職業を持つている切りつめた生活であるから（山獵や川漁を業としてふだん深山幽谷に入るものは減るばかり）、講習會とか養成とかいう金もうけにならず時間のかゝるやり方では、彼等には取りつけない。むかし木暮、冠、槇といつた人たちが、名案内その他をつれてむつかしい山をかけ岩をのぼり谷を探つていられた樣な風に出來るといゝのだが、それもほつておいたのではなかなかむつかしい。

だから資力のある方面の後援を得て、シッカリした人たちで毎年登山隊を組織し、案内者たちをつれて相當むつかしい方面へ出かけることが、差しあたり最も實際的な良ガイドの養成になるのではないかと思われる。

細野邊の若い人たちのスキーは冬のたつきのもとでになるのだから、眞劍にわざを練つているようだ。さいわい冬は別に仕事がない時期だから甚だ都合がいゝ。しかし選手權大會などが遠方で開かれると足代がかさむので、その分を夏中にかせがねばならぬからくるしいと云つてるものがあつた。

山に近い人たちの冬のくらしは、平地に住むものから見ると、實に氣の毒に感じられる。スキーの他は藁細工くらいのものだから、遊んで冗費する時が多い樣だ。何とかして彼等に冬の仕事を與えることは、あらゆる點から見て必要と思われる。北佐久地方のいわゆる農民藝術品など、近頃は相當いゝものが出來ているのを見ると、その實現指導に骨を折られた山本鼎畫伯に頭が下がる。素人の思いつきだが、各戸に緬羊を飼つて（ホームスパンなどシャレたことを考える前に）、毛糸をつむぎ、スウエターや頭巾マフラーや手袋靴下さては敷物などを編んで、スキーヤーや登山客に賣りつけるなどはどんなものであろうか。長野縣では既に緬羊がモノになつているところが他にもあるのだから、縣廳あたりでも眞面目に取り上げてもらいたいものである。

山羊を飼つて、夏場は山小舍や休憩所につれてのぼり生乳を客に供し、おいおいはチーズを作つて賣るというのも、お客の新らしい嗜好に適するのではなかろうか。まだほかにも色々の工夫があろう。山人を愛する人たちに御考えを願いたい。

話が汚くなるが、山中の用便はエチケットだけの問題ではない。登山者が多いところでは重大な衞生問題になる。登山客の良識にまつ以外、山の施設としても、道しるべを立てたり寢ることと食うことを世話する他、今少し山小舍の便所を改善し數をふやすとか、キャンプ場に施設をするとかの工夫がいるだろう。殊に白馬その他女學生の團體登山の多いところでは、今まで一向に考えられなかつた小便用の簡單な設備を澤山作ることは緊要と思われる。

（昭　二六、八、二三稿）

エミール・ジャヴェルの初版本

小野　幸

長い間、讀みたいと思つていたジャヴェルの初版本を藤島さんからお借り出來たので、この登山家をより知りたい方の資料の一つにもと、ノートして見ます。

★

裝幀は六寸一分、三寸八分の縦型で、用紙は四十五斤ほどの印刷紙です。全一册。

表紙は百二十斤ほどの薄草色印刷紙、それに黒一色でSaas-Féeの銅版畫（これはE. Boulenayの作、四寸二分強、二寸五分）の中の上部にE.JAVELLE SOUVENIRS D'un ALPINISTE と四段に活字で組まれ、畫の下にLAUSANNE と一行、そのSとAの間の下から二分ほどの縦ケイがあり、右にArthur Imer éditeur と左にLibrairie F. Payot Rue de Bourg, I. と二分させ行儀よく並ばせています。

なお、この本はその下に五分と一寸五分の横の印刷紙に Paris Librairie G. Fischbacher 33, rue de Seine, 33 と三行に印刷されたものがはられています。すかして見ますが、このはられた下の表紙の部分には何も印刷されたものも隠されておらぬらしいです。表紙の裏は何も印刷されていません。

扉の第一枚は殆んど眞中あたりにSouvenirs D'un Alpiniste と三行におかれています。裏は五分四方位のマークの下に Imprimé par Aug. Pache, à Lausanne. だけです。

第二枚は表は何も刷られず、裏は表紙の版畫（同寸）が刷られ、その下眞中にSaas-Fée. と活字で説明されています。

第三枚目が内表紙でSouvenirs D'un Alpiniste Par Eugène Rambert Portrait de l'auteur et frontispice. その下に左手にJe travaille au relâche à faire de moi une plus noble créature. Goethe. その下がマーク、それから表紙と同じようにLausanne 以下殆んど同じで、1, rue de Bourg.（表紙はRue de Bourg, 1.）が少しちがうだけです。それから下に1886とあるのですが、丁度そこを表紙にはつた印刷の紙片ではられ、隠されています。

こゝで考えたいのは、この印刷紙片をなぜはりつけたかと云うことです。私は二つの理由を持つています。その一つは、このパリの本屋の名を知らせるためです。勿論この本が印刷される時は、契約されていなかつたのでしょう。その二としては、この本が出された一八八六年には賣切れず殘つていたので、その刊行の年を隠したものと思うのです。この年號を知らせたいのでしたら、これを見せて

はつても下に未だ餘白があるのですから。この裏は何も刷られていません。

第四枚は目次です。勿論こゝに掲げられていますので末頁にはありません。（一九二〇年新版には末頁、一九二九年版は初版のように前になつています）この内容は Table des Matières とし、この下に長さ二分のケイが引かれ、その下に

Emile Javelle. Notice biographique et littéraire .....Pages 1—XLVII
Souvenirs de deux étés 1
Une ascension au Cervin 89
Le Cervin et ses difficultés 122
Encore le Cervin.....133
Huit jours dans le val d' Anniviers.....141
Ascension du Weisshorn 188
Ascension du Rothhorn 210
Ascension de la Dent-d' Hérens.....221
Salvan, un village du Valais 228
Les légendes de Salvan 285
Les gorges de la Sallanche 297
Le massif du Trient.....309
Première ascension du Tour-Noir 324
Le mal de montagne.....359
La vallée perdue.....366
Rodolphe Toeffer 375
Les mazots de Plan-Cerisier 396

この裏は何も刷られていません。

第五枚はコットン紙でジャヴェルの密着寫眞（二寸九分、一寸八分縦型）が裏側にはりつけられてあり、その下に E. Javelle と活字ですられています。（古い寫眞の常として今では茶色になつています。）それにしても初版は何部ぐらい作られだのでしようか。とにかくこれで本文に入るのです。

丁數はランベールの序文が四十七頁、それよりジャヴェルの文集が一頁より起して四〇四頁に終つています。

行數は序文が二十七行又は二十九行、ジャヴェル本文も大體二十七行ですが、Le Cervin et ses difficultés と Ascension du Weisshorn, Ascension du Rothhorn, Ascension de la Dent-D' Hérens, Les Légendes de Salvan, Le mal de Montagne と La Vallée perdue が三十二行組となつています。

字數は一行で五十五字から五十二字詰迄ぐらいでしよう。活字は普通のものです。挿畫、略圖等は前に述べたもの以外にはありません。裏表紙は Payot 書店の書目の廣告が表側に刷られ、内側は何も刷られていません。これが初版の解題です。

★

なお、これが再版（一八九二年）になると Vallée perdue と Toeffer が省かれ、これにベラネックの序文が加えられています。

第三版は未見のため記せません。

★

一九二〇年の新版は誰も知つている一般的なもので、今説明する迄もありませんが、この初版に比べて六篇省かれ、しかしグラビヤ版が八枚加えられています。

一九二九年版もほぼ同じで、序文はボルドー（新版より）に改められています。

この本ほど死後に出されたものとしては、内容的に變化のあつた本はすくないと思います。とにかく、この稀書を手に持たせてくださつた藤島さんに心から御禮を申します。

（九・一六）

（イタリー山岳會會章）

會員通信

ベルンにて

高木正孝

其後いかがですか、大變御無沙汰して失禮しています。

私達は暑いさなか、八月十七日に日本を飛び立つて、香港に一晩、カイロに一晩、ローマに三晩泊り、スイスに二十二日につきました。地球がせまいのか、飛行機が速いのか、兎に角餘りあつけなくスイスに來てしまつて、なんだか夢を見ているような氣がします。日本のあの暑さにひきかえて、こつちは話しによれば、まるで夏というものが今年はなく、雨ばかりの寒い天氣がつゞいてるとのこと、なるほどチューリッヒにおりた時は、寒さにふるえあがり、スエーターをきても間にあわず、早速風をひいてしまいました。

出發前の暑さと不眠と、それに飛行機の旅の疲れで、完全にのびてしまつたので、すぐ寒いベルンを發つて、アルプスの南、イタリヤに近いルガノのほとり、ヘルマン・ヘッセの住むモンタニーラに靜養に行きました。初めのうちは天氣が惡く、食つて寢てばかりいましたが、三日ばかり素晴しい天氣をつかみいやという程、モンテ・ローザの東壁を眺めました。こゝからイタリー側がみえるのです。

今年は、昨冬の大雪と、雪崩の慘事のあと、雪が多く、至る所殘雪をみます。歸りは、サン・ゴタルトの峠を越し、アンデルマットに一泊、翌日フルカとグリムゼルの峠を越し、マイリンゲン——インタラーケンと、ベルンに歸つて來ました。

フルカからのグロース・シュレックホルンとフインステラールホルンの姿はいつみても素晴しいですね。途中アイロロ、アンデルマットの雪崩の慘事のあとをみましたし、ゴッタルトの峠の途中では雪崩のデブリーを横切りました。こゝスイスは、戰爭前と少しも變らず、各國の車がみられて、避暑客でうづまつています。ドイツの車とドイツ人の多いこと、イギリス人の錢をかんじようしいしい旅する事が、戰前とちがつて眼につ

きます。そういえばフランスからでた流行のオートストップ。簡單に車を止めてのせてもらい、それで旅をしようというのです。ルックサックに自動車の國際記號、例えばグレート・ブリテンGBをぶらさげ、路ばたにそのルックをおいてまつのです。イギリスの車でもきたらその同情をひこうというわけです。どうも精神が淫蠱精神でかんぷくしませんが、アプレゲールの一つの現われでしよう。

昨日の歸りの汽車から、エンゲルヘルナーから、アイガー、メンヒ、ユングフラウに再會しました。山はいつみてもすばらしいと思います。

新聞にみえた山のニュースを、御承知かと思いますが、おしらせします。

★ フランスのヒマラヤ遠征隊歸る。

マルセイユ、九月三日發のAFP通信によれば、月曜日（三日）にフランスのリヨンのヒマラヤ遠征隊がフランスに歸着しました。遠征隊長 Duplat と Vignes の二人の隊員は實はナンダ・デビーの兩つの峯を結ぶ岩稜の登攀中隊死したのです。生き殘りの五人の隊員は、フランス山岳會代表により出むかえられました。彼等がいうには、遠征（エクスペディション）は不成功とはいえないというのはナンダ・デビー（七八一六、七四三四米）の兩峰頭を登頂し得たのだからとのことです。

つまりナンダ・デビーの兩つの頂のために隊長自身ともう一人が生命を失つたわけです。さすがにヒマラヤですね。

★ もう一つは少し古いニュースですが、イギリスのエベレスト遠征について

八月十九日ロイター通信によると、隊長エリック・シプトンは、八月十七日に長い間アルプスでトレイニングしていた二十四才のボーディロンを伴つて、デリーに向けロンドンを出發したというのです。

他の二人の隊員 W.H.Murray Dr. Michael Ward は今ボンベイ向けの船の上にあるとのことです。

こんどの遠征の意圖するところは、初めてネパール側からエベレストの南西壁を、しかも冬期に攻撃しようというのです。

詳しい戰略はわからない。多分ロンドンの島田さんが、報告して下さることゝ思います。

「土曜會」の皆様にくれぐれもよろしくお傳え下さい。あの樂しい集りが、なつかしく想い出されます。ウイスキーをこちらものんでと行きたいところですが、たかくて手がでません。もつぱら、ワインとキリッシュ、ワッサーに日本の山をたのしんでいます。

少しおちつきましたら、色々御注文や會のことをいたします。

ワセダの方々の遠征の方はうまく行つていますでしようか。なにかお役にたつことがあれば御注文下さい。なにしろお金の方がとぼしいので、其の點不悪お願いします。それでは、成蹊の連中にもくれぐれもよろしく。

一九五一、九、七（成瀬岩雄氏宛）

メイジュを眺めて

吉阪隆正

この夏は、もつぱら自轉車にてアルピニズムを行つています。先づ手始めに中央山塊を突破しましたが、雨と風には相當なやまされました。いま南フランスを巡つてパリーへの歸路、アルプス越えを試み、自轉車を押して二三五〇米の峠を越し、次の峠で一泊しました。今度は晴天に惠まれ、山頂に殘る夕陽を樂しみました。

山越えの自動車道路がよくなつて、自轉車のアルピニズムはなかなか流行つています。のぼりの汗は下りの快走で一擧に去る快味は又別の味です。今冬のアコンカグア遠征の成功を祈ります。

メイジュを眺めながら、遙かに皆様の御健闘を祈ります。

初秋の小倉山

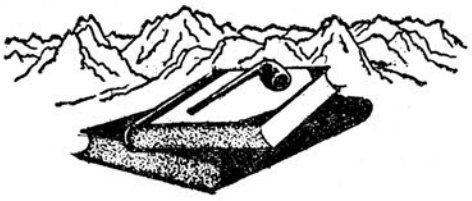
成瀬岩雄

秩父は戰爭中殆んど訪れる者もなく、昔の秩父に返つたという話を聞いていたので、曾て訪れた事のある小倉山に出掛けて見ました。成程、路等全く跡方も無く、唯、山頂眼指してひた登りに登るを餘議なくされました。どうせ獨り旅の事、急ぐ事もなく、途中見晴しの利く所では一息いれながら、木暮さんや田部さん時代の秩父は矢張こんな藪コギだつたのかな—等と想像をしながら登りました。山頂では初秋の快い陽を浴びながら午睡を貪り、久振りで秩父の懐に抱かれた喜びを胸に一杯祕めて歸りました。途中少々進路を誤り、炭燒の少年に會い、イキナリ、「オヂサン 蛇買いませんか。助膜の藥だよ」といわれたのには驚きました。見れば今取つたばかりだという生きのよい奴でしたが、いかにも秩父の山らしいと思いました。その夜は栗生の農家に一夜の宿を乞い、翌日は小海線で小淵澤に出て歸りました。小海線は相も變らず動物車に人閑向きの窓をくり抜いて塗つたような客車を一輛と、貨車數輛という、人間虐待みたいな列車には驚きましたが、滿員のため、私は無蓋貨車に乘せられたものゝ、未だ秋も淺く、暑からず、寒からず、日向ぼつこをしながら、前後左右の山々、淺間から秩父、南アルプス、八ヶ岳等の舊友への應接にいとまなく、却て、あんな汚ない客車にスシ詰めになつている乘客の氣が知れないと思うのでした。坂路に掛つては、降りて走つた方が早い、緩行列車の事ですから、赤蜻蛉が眼の前を亂れ飛んだり、頗冠りのお婆さんの頭に止まつたりしている光景は、いかにも高原列車らしい詩的な情景でした。あそこでは天氣の日には、前後左右の山が見える無蓋車に限ると獨りで決めました。

「山岳」第四五年 内容 既刊

中央亞細亞の山と人　木暮理太郎
回想のヤング尾根　田口二郎
冬のベテガリ岳　早大山岳部
ウイルダー・カイザーに於ける登山講習會　高木正孝
アイスピッケル　調査委員會
白馬岳志雜攷　中島正文
追悼　榎谷徹藏　飯塚篤之助
宮崎武夫　湯淺巖

次號（第四六年）は出來る限り本年度内に發刊したく、御投稿を歡迎いたします。



圖書紹介

Climbing in Britain
by J.E.Q. Barford
"Pelican Books" 1946 160 pp
16 photos 1/6

（J・A・C備付圖書）

イギリスの山登りをする人々への手引として作られたこの本は一九四四年に創立された British mountaineering council の最初の仕事の一つとして出版された。イギリスでは近年山へ登る人々が著しく増えて來ていたが、戰後の第一年には更に急増する見込と記されている。それらのうちの初歩の人々への手引であるが、又更に經驗をつんだ人々にも伴侶となろうとしている。また遭難の十中九は無知或いは不注意、或いはその兩方が原因である。この本によつてそのような遭難の數を減らす事が出來れば本を作つた目的の半分は達せられるとイントロダクションにある。イギリスでは山登りが若い人たちの健康と精神の發育を助けると一そう人々が認めて來ている。その故に、右の委員會も作られたのである。このカウンシルはジ・アルパイン・クラブ、ジ・アルパイン・スキイ・クラブ、ザ・クライマアス・クラブ、ザ・レデイス・アルパイン・クラブ、ザ・スコティシ・マウンテニアリング・クラブなど國内の主なクラブ三〇を代表している。

小さな本であるが用具、食糧、山登り、岩登り技術、登山地案内、氷雪、野營、遭難對策などについて述べ、更にノース、ゲイリック、ウェルシュ語彙の説明、登山團體、山岳書文献等豊富な内容である。山について讀む本としては特にウインスロプ・ヤングのマウンテン・クラフトに親しむ事をすゝめている。テクニクの方では

The Technique of Alpine mountaineering: translated by E.A.M. Wedderburn
Mountaineering on Foot and on Ski: E.A.M. Wedderburn
Mountaineering: the Lonsdale Library
The Hand book of American Mountaineering: Henderson

そのほか數册を擧げ國内の山については

Hillwritings of J. H. Doughty
Let's go Climbing: C.F. Kirkus
British Hills and mountains: Bell and Bozman

など及び各地方の案内書、そして一般山の本として

Wills, Whymper, Leslie Stephen, A. W. Moore, Mummery, Klucker, Julius Kugy, Claude Schuster, G. I. Finch, R. L. G. Irving

などの著書 The Ascent of Nanda Devi: Tilman; Everest 1933: Routledge など三十餘を擧げている。

アペンデイクス三は遭難の救助について、各山岳會が各地に備付けている救助器の所在地、救援車の待つ場所、各地の關係のある警察署、病院、醫者などの名前、電話番號が記されていることは特に私の注意を引いた。

寫眞の一つにユーコン・パック・フレイムをかついでプラットフォムに山靴の青年が少しはにかんだように笑つているのがあるがチャーミングである。

著者は三十二歳（本の出た年に）。エンジニアでクライマア。イギリスの山々に精通した人。一九三九年—四五年ザ・クライマアス・クラブのセクレタリイ、一九四五年からジ・アルパイン・クラブのコミテイをつとめている。

五年前に出ている本であるが、一九四七年再版が數册丸善に來ていたので、私も買求めた（賣價九〇圓）。丸善にはペリカンやペンギュンのいろいろの叢書が今だいぶん並んでいる。（田邊主計）

松方三郎著

「遠き近き」

二十六年十月　熱海龍星閣刊
四六版　二五四頁　寫眞八葉
價　三五〇圓

日本山岳會の會員が、例外なしに山登りが好きなのは言うまでもないことだが、故小島烏水翁のような好い先輩をもつたからでもあろうか、その流れを汲んで、ビブリオ・マニアであつたり、音樂や美術に深い關心を寄せたりする連中が中々少くないのだ。

その中でも著者などは病コーモーの部類に屬するひとり、その上むかしから何のかのと口實だか機會だかを作つて、世界を股にかけもチト大袈裟だが、歐洲米州支那滿洲蒙古印度を驅廻わり、ゆく先き〳〵で古本屋畫商をヒヤかし、到るところで友人知己が出來たり邂逅したりしているのである。平生も捉えるのに骨が折れるほど、神出鬼没の見本みたいに忙しがつていて、一體いつ本を讀んだり、原稿を書いたりするのだろうかと不思議がつていると、いつのまにかこれだけたつぷりした内容を盛つた書物を、世間へ送り出すというのだから、全く油斷も隙もならないとは、このことだろう。

「秋の山、穂高、冬の旅、山の友へ、草原行、印度より歸りて、カシミールの秋、三人の印度人の話、南京を想う、老北京の感懐、英國氣質、ロンドンの店、旅と書物、讀書人の天國、古典への回歸、松方コレクションについて」目次の一部分をこゝに抜き出してみただけで、おゝよその調子が推し測られるであろう。

山ばかりではなく、何を語つても談じても、固くならない著者獨特のユーモアが全巻を通じて流れ愛讀愛藏してたのしい書物と大鼓判を押すに吝かでない。

（藤島敏男）

訂　正

會報一五七號、九頁三段

「ティルマンのマウント・エヴェレスト—一九三八年は一九四八年にC・U・Pから小型本が出た」と書きましたが

『ラトレジのエヴェレスト—一九

三三年は、一九四七年にホダア・アンド・スタウトンの小型本（ブラック・ジヤケット・ブックス）の一つとして刊行された。（この叢書の中には、スマイスの「カンチエンジュンガ・アドヴェンチュア」やサマヴェルの「アフタア・エヴェレスト」も出ている）』と訂正します　（田邊主計）

會務報告

小集會記録

第一三五回　八月十六日
講演　〝ギドレイ〟に就て
講師　會員日高信六郎氏

第一三六回　九月二十日
講演　アメリカの登山界近況
講師　會員中屋健一氏

役員會

八月　常務理事會（八日・十五日）
第六回及第七回國體の件、山岳の件、山日記の件

九月　常務理事會（五日・十九日）
役員總會（二十六日）
第六回及第七回國體の件、福岡山の會ヒマラヤ遠征の件、會計報告

圖書室基金

ルームの二階改造により不要となつた疊六枚を換價して基金に組み入れました。九月末日現在殘高は左の通りです。

一千圓　岩永信雄、二百圓　堀川たね子、三千圓　疊賣却代
小計　四千二百圓
改造費不足額　三、二二六圓
差引殘高　九七四圓

なお、前號（會報第一五七號）「圖書室基金」記事中
改造費不足額一〇、四二六圓
差引不足額　八、一二六圓
とあるのを次の通り訂正します
改造費不足額　五、五二六圓
差引不足額　三、二二六圓

編集費受贈

會員牧野　衞氏より會報編集費として金二千圓の寄贈を受けた。前記各位の厚意と共に謝意を表します。

福岡山の會のヒマラヤ遠征

同會ではかねてシッキムヒマラヤのトウィンス峰遠征を計畫中であつたが、この程、資金關係、海外連絡等の見通しが略々ついたとして日本山岳會へも正式に後援方を依頼してきた。本會は常務理事會で、同會の柴藤會長、加藤委員の右に對する説明を受け、引き續き役員總會に之が可否をはかつたのであるが、愼重檢討の結果、同會の計畫の現段階に於てはいかんながら後援でき難いという結論に達し、この旨柴藤會長宛通知した。しかし、會員が個々の立場で應援協力することに吝かではないので、更に計畫の吟味なり、隊員の訓練なりに、一層の努力と自重とを切望してやまない。

小集會について

毎月第三木曜日にはお茶ノ水の圖書室で定例小集會が開催されているから會員の御參集を希望する。毎回新舊會員堂に溢れるの盛況で、まことに和氣あいあいである。地方在住會員の方々も、所用上京の折は日程をこの日に繰り合わせ御出席願えれば、會員親睦の實は更に結ばれるであろう。

會報に原稿を御送り下さい
十五字詰用紙を使用のこと

編集後記

先月號から行組にゆとりをあたえ、今月からは全文六號活字に變更した。これで、會報も戰前の形態に完全に復したわけである。

地方支部なり地方會員からも積極的に通信を寄せられることを編集者は期待している。

近來續々と海外遠征の計畫が進められている。福岡山の會、早稻田大學等、それぞれの立場で蘊蓄を傾けているのであろうが、できるならば全日本的な遠征隊というような形態なり、レベルまでに早くなりたいものである。

在ロンドンの島田會員からの通信によると、滯歐中の會員伊藤愿氏は、ツェルマットから單身、ガイドも伴わずマッターホルンに登頂した由である。戰後邦人としてスイスアルプスの大物に登つた最初の記錄である。詳わしい報告がなくわからないが、伊藤氏ならやりそうなことだと首肯もされるしまたいかにも頼母しい感じのするニュースである。（N・O）

昭和廿六年十二月二十日　發行
東京都千代田區神田駿河臺四ノ六
發行所　社團法人　日本山岳會
編集者　綫内信彦
電話神田（自五一一一 至五一一一五）
振替口座東京四八二九番
日本體育協會
東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所　株式會社　技報堂

Château Brillant
山頂で　山小舍で
アルペンの氣分が滿喫出來る
純フランス式高級ブドー酒
サドヤ釀造場　甲府市御納戸町
（現品は山岳會ルームにあります）

◉各大學高等學校御用◉
登山用各種天幕
ヘヤーロック・リュックサック
各防水加工品一式
吉田喜義商店
東京都杉並區中通町一番地
中央線荻窪駅北口下車バス清水町下車
電話荻窪（39）0990（呼出）